

ヤコブの手紙2章「憐れみを示さない罪」

1A えこひいき 1-7

1B 集会の案内 1-4

2B 貧富の差 5-7

2A 律法の違反者 8-13

1B 最高の律法 8-9

2B 選べない律法 10-13

3A 行いのない信仰 14-26

1B 役に立たない信仰 14-19

2B 行いによる義の確認 20-26

本文

ヤコブの手紙 2 章を開いてください。ヤコブは、私たちキリスト者が、その信仰と忍耐において、成熟に向かうように勧めている書です。キリスト者が、その信仰の歩みにおいて、試練があり困難があります。この手紙を受け取っているユダヤ人の信者たちは、多くが迫害の中にありました。しかし、そこで信仰を働かせてこそ、その真価が試されます。そこで大事なことは、みことばを、ただ聞くだけでなく行うことです。試練や苦しみ、貧しさの中にいる時に、私たちは、みことばを行っていくことによって、そこに主がおられて、働いていることを知ることができます。ヤコブは、この、みことばの中に生きる祝福を語っています。

その信仰の実践として、身分の低い人々と共にいることを教えています。1 章の最後に、「父である神の御前できよく汚れのない宗教とは、孤児ややもめたちが困っているときに世話をし」とありました(27 節)。主は、律法の中で、何度となく、孤児ややもめを助けることを命じておられました。それが、新約時代の教会にも、教えられています。ところが、なぜか富んでいる人々を持ち上げて、貧しい人を見下していくという過ちを、いつの間にか犯しています。信仰を持っているとされるキリスト者が、持っていない人と同じことをしてしまうことについて、ヤコブが指摘していきます。

1A えこひいき 1-7

1B 集会の案内 1-4

¹ 私の兄弟たち。あなたがたは、私たちの主、栄光のイエス・キリストへの信仰を持っていながら、人をえこひいきすることがあってはなりません。

私たちは、「主、栄光のイエス・キリストへの信仰を持って」といっていますね。主、イエス・キリストは栄光に満ちておられます。その栄光は、この方は、地上を歩まれている時、貧しく、へりく

だっておられました、父なる神のわざを行われることによって栄光を現しておられました。高い山では、ペテロ、ヨハネ、ヤコブに対して、栄光に輝く姿を見せられました。そして、十字架につけられる最後の週、御父がイエス様に、こう声をかけられました。「ヨハ 12:28b わたしはすでに栄光を現した。わたしは再び栄光を現そう。」

その栄光とは、ご自身が全世界の罪のために死なれること、三日目によみがえられること、そして天に昇られることです。ここには、すべての人が、この方こそが主である告白し、ひざまずく、神の栄光があります。この方を信じる者には、どんな人であっても救われるのであり、差別は全くありません。(使徒 15:9、ロマ 3:22)

神は、えこひいきをなさらない方です。「申 10:17-19 あなたがたの神、【主】は神の神、主の主、偉大で力があり、恐ろしい神。えこひいきをせず、賄賂を取らず、みなしごや、やもめのためにさばきを行い、寄留者を愛して、これに食物と衣服を与えられる。」富んでいる者、力ある者には、注目が集まる傾向があります。それゆえ、神の栄光が見えなくさせられるのです。イザヤ書には、富によって人々が高ぶっているところを、主が低くされる預言があります。「2:11 その日には、人間の高ぶりの目は低くされ、人々の思い上がりはかがめられ、【主】おひとりだけが高く上げられる。」

² あなたがたの集會に、金の指輪をはめた立派な身なりの人が入って来て、また、みすぼらしい身なりの貧しい人も入って来たとします。

「集會」と訳されているところは、ギリシア語はまさにシナゴグです。当時の教会は、使徒の働きやパウロの手紙などを見ると、家の教会が多く出てきます。家を開放して、そこに集まります。その他に、ユダヤ人の会堂を使っていた可能性があります。当時の会堂はコミュニティーセンターのようになっていて、いろいろな人が使用できるようになっていました。ユダヤ人たちならば、なおさらのこと、そういうところを使っていた可能性があります。

そこに、「金の指輪をはめた立派な身なりの人」が入ってきたとあります。当時、ローマ社会では、人々が社交場において、仰々しく、左手の指に指輪をはめて、自分が金持ちであることを示していたそうです。そして、「みすぼらしい身なりの貧しい人」とは、乞食に近い人です。ローマ社会では、この二人が交じり合うことは、一切ありませんでした。経済格差どころか、上下の階級の差は歴然としており、同じ部屋には、奴隷として主人に仕えているならまだしも、決して、貧しい者が富んでいる人のところに入ることはありませんでした。その逆もしかりです。

ですから、教会という場は、ローマ社会では人々を身震いさせるぐらいの、驚くべきところだったのです。キリストにあって、すべての人は平等ですから、時には、奴隷の身分の人が牧者となり、みことばを教えているところに、奴隷の主人が新しく来て、自分の奴隷が語る、みことばを聞くこと

は、十分なほどにあるのです。しかし、世にある差別をもって、いつの間にか差別をしてしまっている場面が次に出てきます。

³ あなたがたは、立派な身なりをした人に目を留めて、「あなたはこちらの良い席にお座りください」と言い、貧しい人には、「あなたは立っていなさい。でなければ、そこに、私の足もとに座りなさい」と言うなら、⁴ 自分たちの間で差別をし、悪い考えでさばく者となったのではありませんか。

案内の奉仕をしている人が、立派な身なりをしている人を良い席に案内して、貧しい人には席に導かない、ということをやってしまう過ちを犯します。世においては、これは当たり前すぎる行為です。しかし、礼拝は、栄光の主、イエス・キリストの前に出ることです。この方を信じているといいながら、この方の前に出ているようにはなっていないのです。信じているとされることと、やっていることが、ちぐはぐになっています。

貧しい人々ではないですが、ジーザス・ムーブメントで救われていったヒッピーのことを思い出します。牧者チャックが、たまたま礼拝の日の朝、早く教会に到着したら、「裸足禁止」の標識が立っていました。すかさず、それを取り外しました。役員会で、「絨毯が汚れるから」と言ったので、チャックは、「であれば、絨毯をはがして、コンクリートにすればよい」と強く言いました。イエスは、すべてご自身に近づく者に近づいてくださり、救われるのに、それを自分たちで阻むようなことをすれば、ヒッピーたちは、どう思うでしょうか？イエスの栄光の前に、自分たちが立ちはだかって、その栄光を人々から見えなくさせるのです。これは、主に対する深刻な罪です。

そして4節には、これは差別であり、差別は、「悪い考えでさばく者」とであると言っています。その人のしたことではなく、見た目や、出自、素性であるとか、そういったもので判断すれば、悪い考えになっています。そして、一部の情報だけで判断することも、悪い考えです。イエス様が、ユダヤ人たちがあまた、こうだ判断していたので、このように言われました。「ヨハ 7:24 うわべで人をさばかないで、正しいさばきを行いなさい。」

そして、さばくことは、主がなされることです。主のさばきをもって、さばかなければいけません。それでもさばくのであれば、それは自分が神の座に着くような行為なのです。主だけが正しくさばかれるという真理を否んで、自分自身が主のようにふるまっているのです。

2B 貧富の差 5-7

⁵ 私の愛する兄弟たち、よく聞きなさい。神は、この世の貧しい人たちを選んで信仰に富む者とし、神を愛する者に約束された御国を受け継ぐ者とされたではありませんか。

ヤコブは兄弟愛をもって、よく聞いてくださいと問いかけています。よく考えますと、貧しい人たち

は、自分たちの日常の糧がどうなるか明日分からない中で、主が備えてくださることを信じながら生きています。このようにして、信仰においては富んでいる人々です。私たちが宣教で海外に住んでいた時に、日本のように豊かで、便利なところではありませんでした。しかし、神を信じるのは、毎日の生活のために必須のことでした。しかし、日本にいと、いろいろなことが満たされて、また便利なので、神を特に意識しなくても、生活ができてしまうのです。そうすると、信仰に富む者にはならないのです。

そして、信仰を抱いている者、神を愛している者には、この世よりも、はるかにすぐれた神の御国が到来します。この世で最も富んだ者でも、御国で最も持っていない者よりも、はるかに貧しいのです。キリストの共同相続者になるのですから、どれほど富んでいるかしのれないのです。

⁶ それなのに、あなたがたは貧しい人を辱めたのです。あなたがたを虐げるのは富んでいる人たちではありませんか。また、あなたがたを裁判所に引いて行くのも彼らではありませんか。⁷ あなたがたがその名で呼ばれている尊い御名を汚すのも、彼らではありませんか。

ローマの法律には、借金をした者を、お金を貸している者が裁判に訴えることができました。裁判所にまで引きずり込んで、牢屋の中にぶち込む権利がありました。人を赦さないといけない教えで、イエス様が、一万タラントの借金をしていた者の喩えを語られましたね、それは当時のローマの法律を反映しています。そして、そのように訴えるのは、債権者、つまり富んでいる人々です。そして、キリスト者と呼ばれて、その御名を汚すように迫害するのも、富んだ者たちだったのです。

2A 律法の違反者 8-13

1B 最高の律法 8-9

⁸ もし本当に、あなたがたが聖書にしたがって、「あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい」という最高の律法を守るなら、あなたがたの行いは立派です。⁹ しかし、もし人をえこひいきするなら、あなたがたは罪を犯しており、律法によって違反者として責められます。

ヤコブが、隣人を愛することを「最高の律法」と呼んでいるのは、イエスご自身が、それを第一の戒めとされたからです。数ある律法のうちで、何が最も大切ですか？と尋ねられた時に、主なる神を、心を尽くして、思いを尽くして、力を尽くして愛することと、隣人を自分自身のように愛するという、レビ記 19 章 18 節にある戒めを取り上げられました。そして、えこひいきは、明らかに隣人を自分自身のように愛していません。

そして、最高の律法と訳されているのは、「王の律法」とも訳することができる言葉であり、主なるキリストが、私たちの王であり、王である方が、この律法を詔勅のように出された、ということです。えこひいきを行って、王なる方の律法に違反している、ということです。金持ちをよい席に連れて行

き、みすぼらしい人を席に座らせないというえこひいきは、世の栄光を求めています、そこに、栄光に満ちるキリストが王として着座されているということを忘れているのです。

2B 選べない律法 10-13

¹⁰ 律法全体を守っても、一つの点で過ちを犯すなら、その人はすべてについて責任を問われるからです。¹¹「姦淫してはならない」と言われた方は、「殺してはならない」とも言われました。ですから、姦淫しなくても人殺しをすれば、あなたは律法の違反者になっているのです。

これは、一つの命令を守っているのに、他の命令を守っているから、私は義とされるのだと、自己正当化している態度に対する戒めです。えこひいきしている人に対して、隣人を愛していないではないか？と問われているのに、「いや、私は人殺しをしていないし、姦淫も犯していないし、偶像礼拝はしていません。」といて、自分が他の律法を守っている、自分は神の前で罪を犯していない、あるいは、その罪はそれほど責められなくてよいではないか？と言い訳をすることです。それに対して、ヤコブは、「律法違反をしたら、その一つでも違反者なのだ。すべてを犯したのと同じように、裁かれるのだ。」と言っているのです。

預言者エゼキエルが、こう言いました。「18:24 しかし、正しい人が正しい行いから離れ、不正を行い、悪しき者がするようなあらゆる忌み嫌うべきことをするなら、彼は生きるだろうか。彼が行ったどの正しいことも覚えられず、彼が犯した不信と陥った罪のゆえに、彼は死ななければならない。」どんなに正しいことをこれまでしてきたとしても、不正を行えば、これまでの正しいことは覚えられないのです。逆に、これまでどんなに悪を行ったとしても、その悪を捨てて主に立ち返るなら、これまでの悪は帳消しにされるのです。つまり、一つ一つの律法をどれだけ守っているのかどうかという類のものではなく、今、主の前にいるのかいないのか？ということが問われています。

¹² 自由をもたらす律法によってさばかれることになる者として、ふさわしく語り、ふさわしく行いなさい。

自由をもたらす律法とは、キリストの戒めに留まることによって、罪から離れ、自由にされていることです。そして、神のことばによって、自分自身も裁かれるのだということも抱いて、健全な恐れを抱いている必要があります。「もし私たちが自分をわきまえるなら、さばかれることはありません。(Iコリ 11:31)」とパウロは言いました。きちんと、自分自身をみことばに照らして吟味するのです。そのことによって、みことばにふさわしく語り、また行うことができるということです。

¹³ あわれみを示したことがない者に対しては、あわれみのないさばきが下されます。あわれみがさばきに対して勝ち誇るのです。

貧しい人を顧みること、憐れみを示すことです。そして憐れみを示すことは、自らも神の憐れみを受けることとなります。「あわれみ深い者は幸いです。その人たちはあわれみを受けるからです。(マタイ 5:7)」私たちは、罪に定められる者たちでありました。けれども神の憐れみは、その罪のために打ち勝ちました。同じようにして私たちも、憐れみによって勝利するのです。

反対に、憐れみを示さないと憐れみのない裁きがあります。罪を赦さない人の譬えを思い出してください。一万タラントという多額の借金を帳消しにもらったのに、友人の少額の借金を赦せませんでした。そのために、彼はその大量の借金を返済するまで牢屋に入れられたのです。

あわれみがさばきに対して勝ち誇ることについて、思い出するのが、牧者チャックの証しです。教会の人で、自分の夫が違う女のところに行ってしまったとあって、完全に打ちのめされていました。その姦淫の生活について、他の人がすでに行き、何とかその罪を悔い改めようとさせるべく、みことばで、姦淫の罪の重さを示して、神からの裁きがあることを教えたいです。けれども、ますます頑なになりました。チャックがそこに行きますと、迎え入れてくれました。そして彼は、何も言えなくなったそうです。なんと、そこで泣き出してしまいました。泣いて泣いて、それで、アドバイスも何もすることができず、出て行ったそうです。自分がなんと、馬鹿なことをしたのか？とその時は思ったそうです。ところが、後日、その男はその女の家から出て行って、家庭に戻ってきました！人に対する憐れみが、さばきに勝ち誇ったのです。

3A 行いのない信仰 14-26

1B 役に立たない信仰 14-19

¹⁴ 私の兄弟たち。だれかが自分には信仰があると言っても、その人に行いがなければ、何の役に立つでしょうか。そのような信仰がその人を救うことができるでしょうか。

ここで大事な言葉は、「信仰があると言っても」の「と言っても」にあります。「神を信じます、イエス様を信じます。」と言ってはいるけれども、相応する行ないがないなら、何の益になるのでしょうか。私たちは、霊的な会話をすることはいっばいできます。そして、霊的なことを話している人々が、そのまま霊的なように見えます。しかし、自分自身にその霊的な会話に相応する実が結ばれているのでしょうか？

そして、そのような信仰が、その人を救うことができるのか？と言っています。ここで人が誤解をします。「パウロが、行ないによるのではなく、信仰によって救われると言ったのに」と。しかし、今ヤコブが語っているのは、信じていることの種類です。私たちは、神の恵みによって、信仰のみによって救われます。しかし、その信仰は必ず行ないによって現れるのだ、ということです。

そこで、行ないではなく、信仰によると言ったパウロの言葉を、文脈をもって読んでみましょう。

「エペ 2:8-10 この恵みのゆえに、あなたがたは信仰によって救われたのです。それはあなたがたから出たことではなく、神の賜物です。行いによるものではありません。だれも誇ることはないためです。実に、私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをあらかじめ備えてくださいました。」恵みのゆえに、信仰によってのみ救われると言った後で、すぐに良い行ないをするために造られた、とあります。ですからパウロも、ヤコブと全く同じように、「行ないの伴う信仰」を教えています。

¹⁵ 兄弟か姉妹に着る物がなく、毎日の食べ物にも事欠いているようなときに、¹⁶ あなたがたのうちのだれかが、その人たちに、「安心して行きなさい。温まりなさい。満腹になるまで食べなさい」と言っても、からだに必要な物を与えなければ、何の役に立つでしょう。

ヤコブは続けて、人に対する憐れみ、貧しい人や事欠いている人々に対する憐れみについて話しています。そして、ただ憐れみの言葉を言っているだけでは、全く役に立ちませんね。具体的に、必要な物を与えて、初めてその言ったことが真実であることが現れるのです。

¹⁷ 同じように、信仰も行いが伴わないなら、それだけでは死んだものです。

「死んでいる」という強い言葉を使っています。これは先ほどの「人を救うことのできない信仰」と同じことであり、死んでいるということです。ここで大事なことは、ヤコブは「信仰」と「行ない」を対比させていないということです。「行ないのともなった、生きた信仰」と、「行ないのない、言葉だけの死んだ信仰」の比較です。

¹⁸ しかし、「ある人には信仰があるが、ほかの人には行いがあります」と言う人がいるでしょう。行いのないあなたの信仰を私に見せてください。私は行いによって、自分の信仰をあなたに見せてあげます。

ヤコブは、信仰と行いがあたかも別の物であるかのように話す人に対して、そうではないことを教えています。行っているところに、その人が本当は何を信じているのかが現れている、というのが正しいです。信仰には、行ないをもたらす力と源があります。その行ないによって信仰があるのかどうかを示すのです。例えば、みなさんは、ご自分の座る椅子が壊れないと信じているから、座っているのです。座っているということは、この椅子が自分を保つということを信じて座っているのです。座るという行ないに、その信仰が現れています。

そしてヤコブは、「見せましょう」と言っていますね。信仰そのものは、目で見えないものです。ヘブル書で学びました、「11:1 さて、信仰は、望んでいることを保証し、目に見えないものを確信させるものです。」目に見えないものを確信させるものです。けれども、行ないは見ることができます。

東日本大震災の後に、ある人からメールが来ました。神はこの地震と津波によって、どこにおられるのか？という問いかけでした。私は、こう答えたと思います。「キリスト者がそこにいることによって、神がおられることを示すのを、神はみこころとしておられる。」肉体を持つキリスト者が、目に見える形でそこにいることによって、確かにキリストがおられることを見ることができます。信仰は、このように行いの中で、目に見えるようになるのです。

¹⁹ あなたは、神は唯一だと信じています。立派なことです。ですが、悪霊どもも信じて、身震いしています。

これは、ユダヤ人の中では馴染みのある信仰告白です。「聞け、イスラエルよ。【主】は私たちの神。【主】は唯一である。(申命 6:4)」神はおひとりだ、というのは、ユダヤ教徒は今でも毎安息日に告白している内容です。私たちであれば、「私たちは、イエスがキリストであり、主であることを信じます。」と言っているのと同じです。

この告白自体は立派です。しかし、それでは十分でないことを、ヤコブは悪霊どもの例を出しています。「マル 1:23-24 ちょうどそのとき、汚れた霊につかれた人がその会堂にいて、こう叫んだ。「ナザレの人イエスよ、私たちと何の関係があるのですか。私たちを滅ぼしに来たのですか。私はあなたがどなたなのか知っています。神の聖者です。」」それだけ信じていても、悪霊どもはもちろん神の救いを受けていません。信じると言っても、どんな信仰なのかが、ですから問われるのです。悪霊が信じているというのは、ちょうど、非常にすぐれた刑事から逃げている、脱獄した囚人のようなものです。その刑事が凄腕であることを知っているのです、だからといって、正直に捕まえられることはしませんね。それと同じです。私たちの信仰とは、愛と真実のともなう信頼なのです。

2B 行いによる義の確認 20-26

²⁰ ああ愚かな人よ。あなたは、行いのない信仰が無益なことを知りたいのですか。

何度となく言っても、それでも分かっていない時に、それを愚かと言いますね。何度となく教えているのに、まだ悟らない人たちがいるのでしょう。それで、再び、行いのない信仰が無益であることを説き明かします。

²¹ 私たちの父アブラハムは、その子イサクを祭壇に献げたとき、行いによって義と認められたではありませんか。²² あなたが見ているとおり、信仰がその行いとともに働き、信仰は行いによって完成されました。²³「アブラハムは神を信じた。それで、それが彼の義と認められた」という聖書のことばが実現し、彼は神の友と呼ばれたのです。²⁴ 人は行いによって義と認められるのであって、信仰だけによるのではないことが分かるでしょう。

午前礼拝で詳しく、アブラハムの生涯についてお話ししましたので、ぜひそちらを聞いてください。ヤコブは、そもそも、行いのない信仰などないのだということを、アブラハムの例を出して言っているのです。信仰によって義と認められたアブラハムも、その信仰が、イサクを祭壇に献げたところで行いに現れています。何の働きもない時に、主と主の言われたことを信頼しました。その信仰が義と認められました。そして、その信頼は、イサクをいけにえとして屠ったとしても、神はイサクをよみがえらせてくださるというところまで及んでいたのです。ですから、主がイサクを祭壇で献げよ、と言われた時に、聞き従うことができたのです。

ところで、アブラハムは「神の友」と呼ばれました。ユダヤ人はアブラハムのこの別称をよく知っています。「イザ 41:8 だがイスラエルよ、あなたはわたしのしもべ。わたしが選んだヤコブよ、あなたは、わたしの友アブラハムの裔だ。」彼が、神を信じるところにこのような親密な関係があったのです。ですからただ単純に、神を抽象的に信じたのではありません。またやみくもに行動に移していくような機械的なものでもありませんでした。

²⁵ 同じように遊女ラハブも、使者たちを招き入れ、別の道から送り出したので、その行いによって義と認められたではありませんか。

アブラハムの他には、ラハブも取り上げています。アブラハムといえば、イスラエル人の父です。けれども、異邦人であっても、信仰によって彼を父と仰いでいます。けれども、ユダヤ人だけが、行いによって、信仰による義が証しされただけでなく、異邦人も同じように、その信仰が行いによって証しされたことを示したかったのでしょう、カナン人のラハブを取り上げています。ユダヤ人と異邦人に、行いのともなう信仰について原則は変わりません。

彼女は遊女でありましたが、しかし、先ほど話しましたように、主は分け隔てなく、憐れみによって、信仰によって生きる人を義と認めてくださるのです。彼女は、信仰によってイスラエルからの使者たちを受け入れて、別の道から送りだしましたが、イスラエルへの神への恐れが、彼女を行いへと突き動かしたのです。

²⁶ からだが霊を欠いては死んでいるのと同じように、信仰も行いを欠いては死んでいるのです。

「死」というものの定義は、別離であります。引き離されることでもあります。ですから、霊がからだから離れたら、そのからだは死んでいるということになります。この喩えによって、信仰に行ないが結びついていなければ、死んだも同じなのだと言っているのです。

ロマ書 1 章 17 章から、救われるのは信じることによるのみなのだ悟ったのが、ルターでした。それで、宗教改革が始まりました。そのルターは、ヤコブ書を藁の書とまで言ったのです。自分の

信じている、信仰による義と相いれないからだとなりました。

しかし、それと同時に、ルターは、ローマ人への手紙の注解書の初めに、信仰をこう説明しています。「信仰とは、なんと生きていて、創造的で、活動的な力強いものだろう！信仰が善を行うことをやめることはありえない。信仰は、善い行いがなされるべきかどうかを問うのではなく、問われる前に、それを行っているのだ。信仰は常に能動的である。そのような行いをしない者は、信仰がないのである。信仰と善い行いを求めて手探りで探し回っても、信仰や善い行いが何であるかを知らないのである。」¹すごいですね、これほど上手にヤコブが 2 章で語っていることを説明している文はありません。これが、行ないによらず、信仰によって義と認められると論じたパウロの手紙の注解書にあるのです。

今回は、舌を制することについて、ことばについてです。信仰があると言っているのに、憐れみの行いがいないことを 2 章は取り扱いましたが、今回は、信仰者だと言っているのに、他の兄弟を裁いたりして、舌を制御していない問題について、ヤコブが取り扱っています。

¹ https://www.ccel.org/l/luther/romans/pref_romans.html